

「身近な国際交流」

ブルース・L・バートン

1995.10.9 放送

この数年、日本人が外国人と接する機会が非常に多くなっています。皆さんにとっては、国際交流は単なるフレーズだけではなく、現実的な課題となりつつあると思います。今回は、国際交流とは何か、どのような心構えで交流に臨むべきかということについて考えたいと思います。

まず国際交流の定義ですが、簡単にいえば、国際交流とは、外国人との個人的なそして草の根的な接触です。政府が行う国家同士の関係、つまり外交関係に対して、民間レベルの付き合いです。

こうした国際交流が行われる場としては、まず海外と国内が考えられます。つまり日本人が海外へ行って現地の人たちと出会う場合と、外国人が日本に来て日本人と接触する場合です。このチャートで分かりますように、いずれの場合も日本人が外国人と触れ合う機会が最近多くなっています。日本人の出国者は、毎年増える傾向にあり、去年過去最高の1,358万人となりました。つまり去年だけでも国民の10人に1人が海外へ行って来ました。ほとんどは観光客です。これに対して来日する外国人の数は比較的少なく、最近横這いになっていますが、それにしても5年・10年前に比べて大変多くなっています。

一方、本人同士が直接に会わない国際交流もありえます。つまり、手紙・ファックス・パソコン通信といった手段による交流です。これらの機会も最近多くなっています。特にインターネットという世界共通のコンピュータ・ネットワークの普及によって、一般の日本人もほとんど国境を意識せずに海外の人と個人的なやり取りが出来るようになりました。パソコン通信の普及は日本の国際化に拍車をかける、画期的な出来事です。

交流がどんな形をとっても、結局問題となるのは、相手とのコミュニケーション方法です。いかにして相手とのやり取りを円滑に出来るかという根本的な問題です。

当り前のことですが、まずは共通語がなければなりません。こちらが相手の言葉を覚えるか、向こうがこちらの言葉を覚えてくれるか、どちらかが必要条件です。

しかしこれだけではありません。言葉が同じでも、お互いが考えている意味が違うかもしれない。有名な例ですが、日本人が英語をしゃべる時に、「yes」という単語を連発することがよくあります。なぜなら、日本語の「はい」と同じように考えているからです。しかし、日本語の「はい」が、「あなたの話を聞いていますよ」、という相槌的な意味で使われるのに対して、英語の「yes」は「承知しました」あるいは「賛成です」という肯定的な意味が強いのです。「yes」を使いすぎると、大きな誤解を招く結果になりかねません。

こうした誤解を少なくしよう、という目的で開発されたのが、「異文化間コミュニケーション」という学問分野です。「異文化間コミュニケーション」の説くところによれば、違う文化の人とうまく通じ合うためには、言葉だけではなく、言葉の裏にある表現の仕方、さ

らには基本的な考え方や文化までを理解しなければなりません。いわれてみれば当たり前のことです。皆さんがもし外国へ行ったり日本に来ている外国人留学生や観光客に接触する予定があれば、その前に是非「異文化間コミュニケーション」を勉強しておくといえます。相手の文化と日本の文化との違いをある程度理解できれば、大きな誤解は避けられるでしょう。

問題はむしろ日本国内に住んでいる外国人との交流です。在日の外国人は、皆さんが普段の生活のなかで接触できるから、外国人のなかでも一番身近な存在だと思われます。身近な存在だけに、相互理解が簡単だと思おえの方が多いと思いますが、実態はむしろ逆です。日本人にとっては、国際交流のなかでも一番難しいのは、在日外国人との交流ではないでしょうか。

まず事実関係ですが、日本に滞在する外国人の数は、毎年少しずつ増える傾向にあり、1993年の時点で初めて日本の総人口の1%を超えました。現在では約135万人いると思われます。国籍でいえば、アジア系の人々が圧倒的に多く、地域的には東京を初め大都会に集中的に住んでいます。滞在期間については、一時的に日本に住みいずれ国に帰る人もいますが、長期滞在者や永住者も多く、なかには、日本で生まれ育った外国籍の人もかなりいます。

この他に、日本の国籍を持っている人もいます。日本に帰化をした外国人や、日本人と外国人との間に生まれた、いわゆるハーフの人です。ハーフは以前日本の国籍がとれない場合もありましたが、今は簡単にとれるようになっています。ハーフの数も近年急増しています。なぜなら、日本人の国際結婚がこの10数年驚異的に伸びてきたからです。この表でわかりますように、日本人の国際結婚数が1990年には80年の3.5倍にもなっています。1992年の時点では約1万9千人の日本人が外国人と結婚したのですが、これが全国の総結婚数の約40分の1に当たります。国際結婚は、日本の国際化を飛躍的に促進させる原動力の一つとなりつつあります。

多くの日本人は国内に住んでいる外国人やハーフとの交流を国際交流の単なる延長だと考えているようです。数年前経済企画庁によって行われた調査では、日本人の72%が、日本にいる外国人との接触に当たって、「お互いの生活習慣の違いを理解し、お互いに相手の生活習慣を取り入れて交流す」べきだと答えました。これは「異文化間コミュニケーション」の基本的な考え方と一致します。

しかし海外旅行などの場合とは違って、日本に居住する外国人やハーフなどとの関係は、こうした単純な交流法でうまく行くとは思われません。なぜなら、彼らはマイノリティー、つまり日本社会における少数派、という立場に置かれていて、マイノリティー特有の考え方や自我意識があるからです。人にもよりますが、概していえば、自分と周りの人との違いをはっきり意識していて、自分のアイデンティティーに対するプライドという肯定的な気持ちがある一方、自分を否定して、周りの人と一緒になりたいという矛盾した気持ちを合わせ持っていることが多いのです。

ですから、日本に住んでいる外国人などとの接触に当たって、相手の心境がかなり複雑かも知れない、ということをも頭に入れておく必要があります。異民族であることを敢えて無視することはないのですが、必要以上に触れることもありません。

先ほどもいいましたように、定住外国人のなかには、日本で生まれ育った人も多いです。名前や顔つきが日本人と少し違うかも知れませんが、皆さんと同じ日本語を喋り、同じ日本文化を共有しています。ですから、好意のつもりでも彼らを珍しがったり、本人もできないかも知れない外国語で話しかけたりお国の事情を聞いたりするのは相手と場合によってはありがた迷惑になるかも知れません。

このように、日本人と国内に住む外国人やハーフとの関係は、相互理解から始まらなければなりません。その意味では一般的にいう国際交流と全く同じです。しかし決定的に違うのは、一時的なお付き合いではなく、これからもずっと続く関係だという点です。それだけに複雑なものがありますが、その複雑さを理解すること自体が、共存への第一歩ではないでしょうか。

では。